

IBD 患者さんに普通の日常生活を

北里研究所病院で炎症性腸疾患（Inflammatory Bowel Disease : IBD）の患者さんの診療に携わっておりますが、今回から城南地域の IBD 患者さんと IBD 医療従事者を対象に、本ホームページを使ってメッセージを伝えていくことにしました。大学卒業以来 50 年に渡り IBD に従事してきた経験と知識をもとに月に 1-2 回の割で書かせてもらおうつもりです。

<適切な治療で多くの IBD 患者さんが普通の生活を送れるようになりました>

潰瘍性大腸炎とクローン病に代表される IBD は、「慢性に続く難病で、一生闘病し続けなくてはいけない」と誤解されています。原因不明で根本治療がなく、生命予後は比較的良好ですが、患者さんは長期にわたって病気と付き合うこととなり、日常生活も普通に送れないと考えられていました。確かに 21 世紀以前は治療薬も少なく、難病と考えられてきました。しかし、21 世紀に入り免疫反応の異常を抑える「抗 TNF α 抗体薬」が臨床応用され、その画期的な治療効果と長期使用の安全性が確認されました。その後次々と作用機序も異なる新薬が開発され、その有効性から多くの患者さんが普通の生活を送れるようになりました。

IBD では腸に慢性の炎症を生じますが、適切な治療を選択し、この炎症をうまく抑えれば、副作用も少なく無症状の状態が保てるようになりました。しかし、現在の治療法はあくまでも炎症を抑える対症療法であって根本的な治療法ではありません。根本治療がなく完治ということがないため、炎症の起きないように、かつ炎症のない状態を続けるため、病院など医療機関との付き合いは続き長期の管理が求められます。患者さん個人個人に合ったきめ細やかで適切な医療が求められますが、それが行われれば普通の日常生活が可能となりました。そのためには、患者さんだけでなくその家族を含めた周りの方々にも病気について正しく理解してもらうことが必要です。単に病気のコントロールだけでなく、看護師さんや薬剤師さんなど医療従事者と患者さんが、外来や病棟での診療だけでなく心でも繋がれば、患者さんが普通でかつ心配のない生活を送れる病気と考えています。すなわち、看護師／薬剤師／栄養士など医療機関の人々を含めて、患者さんの家族やその周囲の人々とのチーム医療が大切と考えています。北里研究所病院でそのような環境を作っていくよう今後も努力しようと思っています。

今回は、IBD の治療薬についてその長所や短所についてお伝えしようと思います。

日比紀文
慶應義塾大学名誉教授
令和 6 年 8 月 16 日